



フォン・ゲッツェ駐日ドイツ大使 ご夫妻の熱海日向別邸訪問

お茶の水女子大学名誉教授 田中 辰明

はじめに

秋も深まり始めた2022年10月14日フォン・ゲッツェ (Dr. Clemens von Goetze) 駐日ドイツ大使ご夫妻と一等書記官のゼーンケ・グロートフーゼン文化部長 (Dr. Soehne Grothusen) が熱海日向別邸を訪問された。フォン・ゲッツェ大使は以前は駐中国大使であった。メルケル首相時代はドイツは日本より、中国を大切にしていた。しかし政策の変更により、中国より、日本を大切にするようになり、フォン・ゲッツェ大使が駐日大使として赴任された。ベルリン出身の実力大使である。大使は日本文化の理解に尽力されている。

建築家ブルーノ・タウトはベルリンに1920年代に12000戸の集合住宅を建設している。大使のご両親もタウトが設計した住宅に住んでいたことがあり、タウトファンである。タウトはナチス政権を逃れて来日し3年と5ヶ月を日本で生活した。タウトはベルリン工科大学の客員教授もしていたので、来日すれば、東京帝国大学教授くらいに迎えてもらえるであろうと考えていたのがあったが、当時の日本政府はナチスと共にやっぺいこうと考えていた時代であったので、そう簡単にはいかな



写真1 高崎の少林山達磨寺で広瀬正史住職から寺院の説明を受けるゲッツェ駐日ドイツ大使 (2022年5月12日)



写真2 少林山達磨寺講堂におけるゲッツェ駐日ドイツ大使と筆者

かった。やむなく、高崎の少林山達磨寺の洗心亭に籠り、桂離宮や伊勢神宮の簡素な素晴らしさを世界に紹介する著作に専念した。大使ご夫妻は2022年5月12日に少林山だるま寺を訪問されている(写真1, 2)。筆者も同行したが、洗心亭、達磨寺を広瀬正史住職のご案内でつぶさにご覧になっている。その時にタウトの我が国に残る唯一の作品が熱海の日向別邸であることを知られ、見学を希望されていた。しかし公務の多忙もあり、実現したのが2022年10月14日であった。

1. 日向別邸

大使ご夫妻は東京の大使館を公用車で出発、午前11時に熱海の日向別邸に到着された。日向別邸玄関で齋藤栄熱海市長の歓迎を受け(写真3)邸内に入られた。

日向別邸は日本に残る唯一のブルーノ・タウトの作品である。日向別邸は2005年に熱海市指定有形文化財に指定された。2006年には日本国の重要文化財に指定されている。この建物は1933年から1936年の間にかけて日向利兵衛により建築された住宅兼ゲストハウスである。この建築に携わったのは渡辺仁(1887~1973)とブ



写真3 日向別邸玄関で齋藤栄熱海市長の出迎えを受けるゲッツェ
駐日ドイツ大使



写真4 東京中央郵便局

ルーノ・タウトの建築家2人と清水組である。ブルーノ・タウトは地下室部分を担当した。

この建物は木造の2階建である。上屋の擁壁を兼ねて人工の庭園が作られた。これは建物の南側、相模湾に面した方向に当たる。この人工庭園の下に地下室が作られ、この設計をブルーノ・タウトが担当した。

建築家渡邊仁は旧第一生命ビルの設計者として有名である。渡邊仁は他に、横浜ニューグランドホテル(1927年)、銀座和光(1932年)、東京国立博物館(1937年)などを設計している。昭和の建築史の重要建築物を手掛けた大建築家である。

日向別邸は3つの工期に分けられる。一期工事は傾斜地に立つ木造2階建ての建物である。二期工事として基礎部と屋上庭園が造られた。3期工事としてタウトが基礎部の躯体を使用して地下室を作った。3期工事では棟梁の佐々木嘉平(1889~1983)が腕を振るった。

タウトは1935年5月に日向別邸の設計を始めた。東京中央郵便局(写真4)を設計した吉田鐵郎(1894~1956)がタウトの設計を手伝っている。タウトは東京には西欧の建築を模倣した建築が多いと批判した。タウトが例外的に絶賛したのが吉田鐵郎が設計した東京中央郵便局であった。

発注者であった日向利兵衛(1874-1939)は大阪の実業家であった。彼は極めて工芸的、芸術性の高い家具類を販売する「唐木屋」の一人息子として生まれた。彼は語学が得意で、幅広い人脈を持っていた。そして語学力と人脈を生かして貿易活動を行った。特にアジア貿易で財を成し、また美術、建築に造詣が深かった。そして特に紫檀、黒檀の貿易に力を入れた。日向利兵衛はタウトがデザインした電気スタンドを銀座のミラテス工芸店で購

入し、タウトのデザイン能力に感銘を覚えた。そこで熱海に既に完成していた邸宅の鉄筋コンクリートの下部構造にできた空間に居間と社交場を作るようにタウトに依頼した。この場所は半地下室に当たる。施工は清水組(現在の清水建設)が担当した。またタウトの設計に基づき大工仕事を行ったのは、棟梁佐々木嘉平であった。タウトは日向別邸において、竹をはじめとする日本的な素材を使用し、桂離宮の面影が見られる設計を行った。桂離宮では竹が多く使用されたが、日向別邸でも竹が好んで使用された。

洋間も傾斜地に建設されたので、段々がある。桂離宮では古書院の前に月見台がある。月見台に座り、中秋の名月の日に前面にある池の上に上がる月を楽しめるように設計されていた。タウトは2回桂離宮を訪問し、感激をした。そして日向別邸の設計では洋間の段に座り、やはり中秋の名月に前面の相模湾に上がる満月を楽しめるようにした。洋間の床は黒色の檜材の寄木張りが使用され、満月の明かりが床に反射したそうである。

1階から階段を下りて、タウト設計の社交室に入るところに、4段の半円の小さな階段がある(写真5)。4本の真竹がm字型に曲げられ、半円を描く階段の手すりとなっている。結合部分は棕櫚縄を用いて垣根風に仕上げられている。階段の踏み板はチーク材が用いられ、丸みを持つ段鼻を設けている。階段の踏面(ふみづら)は手すりの竹を貫通させ、これがぐらつかないように強度を持たせている。蹴上部分には桐の板を用いる繊細な仕上げとなっており、斬新な日本風階段が作られた。

社交室の東側はアルコーブとも見て取れる部分である。竹を多彩に使用した空間である。壁には細竹を交互に詰張りし、細竹の節を最大限に残している(写真6)。